

六朝文人の別集の一形態

——陸雲集の書誌學的考察——

序

六朝時代の主要な文人の別集は、『七錄』を始めとする當時の書目類のなかに寫本として著録されて以來、ほとんどみな再編・散佚・重輯の過程を経てきているといつても過言ではない。従つて各別集の流傳狀況の調査は、單なる書誌學的な研究對象にとどまるものではなく、當該詩人の文學研究を根底から支えるものとして、意義が高いはずである。明代後半に編纂された『漢魏六朝一百三家集』等の總集は、多くの別集を収録しているとはいへ、各別集の信憑性については、今日なお多くの問題が残されている。

また各別集の流傳狀況は、各時代特有の詩文實作の態度や文學理念・文學主張等と關連してゐるであらうし、さらに當該詩人の文學評價の歴史的變遷や影響力の濃淡を考へるうえでも、一つの重要な基礎的資料を提供することになるだろう。

しかしそれにはやはり、主要な別集を個別的に調査して、ある程度の研究成果を蓄積しなければならない。この拙稿は、このような考へのもとに、西晉の文人陸雲(云一)(云三)の別集をまず取りあげたものである。陸雲集は、後述するように、南宋以後、兄の陸機集との合刻

本というかたちで流布していった。従つてこの稿のなかには、陸機集の流傳についてもかなり觸れている。

植 木 久 行

一 寫本時代の陸雲集——五十卷本の推定——

『隋書』經籍志四には、陸雲の別集として、晉清河太守陸雲集十二卷を著録し、注に「梁十卷・錄一卷」とある。また兄の陸機の別集、晉平原内史陸機集十四卷を著録し、注に「梁四十七卷・錄一卷、亡ぶ」とある。これによれば、陸機集は南朝時代の末に散佚し、少くとも卷數上においては、(四十七卷・錄一卷)本から(十四卷)本に著しく減少している。これに對して、陸雲集の卷數は逆に(十卷・錄一卷)本から(十二卷)本へと増加しており、陸機集のような大きい散佚に會わなかつたように見える。

しかし、陸雲集も『七錄』の編纂された梁の普通年間(五〇〇—五二六)以前の段階において、實は陸機集に劣らぬ大きな散佚の事態が生じていたと推定されるのである。『晉書』卷54陸機傳には、「所著文章、凡三百餘篇、並行於世」とあり、梁の阮孝緒撰『七錄』(内編・文集)に著録する(四十七卷・錄一卷)の陸機集は、本傳に記す三百餘篇にほぼ近い作品數を収録していたと思われる。これに對して、陸雲の作品は

三百四十九篇(晉書傳)とされ、少くとも數量的には、兄の陸機を凌いでいたわけである。ところが、隋志や『七錄』に著録する陸雲集の卷數は十卷あまり(十卷・錄一卷本と十二卷本の二種)にすぎず、陸機集に八四十七卷・錄一卷本があるのとは著しく異っている。陸雲集にも、陸機集と同様に、五十卷に近い別集がかつて存在していたのではなからうか。

このことを裏付けるのは、三世紀前半の葛洪撰『抱朴子』の逸文に、余見二陸之文百卷許、似未盡也、

とある記述である(山陰縣志)。これによれば、二陸集は少くともあわせて百餘卷あつたわけである。従つて陸雲集にもかつて陸機集と同様に、五十卷前後の別集が存在していたと推定されるのである。やはり陸雲集は、陸機集よりも早く散佚したと捉えるのが自然であらう。潘陸と並稱される陸機の文學的評價は、六朝期を通じて、かなり高かつたはずである。その陸機の別集の方がより遅く散佚したということは、六朝期の文學的評價の實態に即してみても、きわめて當然の結果であるといわなければならない。

唐の開元年間、宮中の秘庫に收めた書籍に基づく『舊唐書』經籍志下、およびそれ以後の作品集を補充して作つた『新唐書』藝文志下には、ともに陸雲集十卷を著録するのみであり、少くとも隋代から唐初の期間に傳わつていた陸雲集十二卷本は、すでに散佚してしまつたようである。ちなみに、藤原佐世撰『日本國見在書目錄』には、陸雲集は未著録である。

北宋においては、仁宗の慶曆元年(一〇四一)に成る『崇文總目』別集の條に、陸雲集八卷を著録している。陸雲集の八卷本は、この書目によつてのみ現われ、それ以後の書籍目錄の類には全く見えず(但し張燾の總集所收のものに陸)、南宋の紹興二十一年(二五)の自序を有する晁公武撰『昭德

郡齋讀書志』卷四上(本)には、ふたたび陸雲集十卷を著録する。ちなみに、その解題は、『晉書』陸雲傳の節略にすぎない。また尤袤(二三〇—二四〇)撰『遂初堂書目』別集類にも、陸雲集が著録されているが、周知のごとく、卷數等の記載を缺いている。

二 南宋の官刊本——今日の陸雲集傳本の祖——

陸雲集の流傳する過程において、最も大きな役割を果した刊本は、南宋の慶元六年(一一三六)二月十六日に、信安の徐民瞻が刊行した晉二俊文集二十卷本である。「二俊」という語は、西晉の政界・文壇の中心人物であつた張華(三三—三〇〇)が、入洛してきた陸兄弟に會つて喜び、吳の平定の利は、二俊を得たことにある、と述べた有名な逸話を踏まえている。つまり、晉二俊文集は、陸雲集十卷と陸機集十卷の合刻本なのである。

徐民瞻は、以前『文選』等に收める二陸の作品を読み、「其の詞は深にして雅、其の意は博にして顯、遠く枚(枚・馬(相如))を越え、高く王(王・劉(勰))を躡み、百代の文宗なり」とし、その全集が見れないのを残念に思つていた。そこで郷老に尋ねて、陸機集は「文賦」で始まる十卷本であり、陸雲集は「逸民賦」で始まり、陸機集同様に十卷本であることを知つたが、久しく入手できなかった。たまたま陸兄弟の故郷である華亭縣の知事となり、年來の宿願が果たされることになつたという。徐民瞻の「晉二俊文集」には、さらに次のように記される。

因訪其遺文於鄉曲、得士衡集十卷于新淮西撫幹林君、其首篇冠以文賦、士龍集十卷則無之、明年移書故人秘書郎鍾君、得之于册府、首篇逸民賦、悉如所聞、亟繕寫、命工鏤之木以行、目曰晉二俊文集、

これによれば、陸兄弟の故郷にも、陸雲集はすでになく、南宋の宮廷文庫である冊府(秘書)の中から、友人の秘書郎鍾君が尋し出してくれたというのである。このことは、當時における陸雲集の傳本の少なさを如實に表わすものであろう。またこの晉二俊文集に収めた陸雲集の底本は、『宋史』藝文志七に著録する陸雲集十卷本のものであるかも知れない。ただ宋代の數種類の書目から重複や矛盾を取り除いた編纂とされる『宋史』藝文志が、『崇文總目』に著録する八卷本を記さず、その後収集した十卷本を著録したということは、やはり一應注意すべきであらう。

奉議郎知嘉興府華亭縣事である徐民瞻は、また次のように言う、宋朝の建國された建隆元年(九六〇)以來、二陸集は久しく埋没して傳わらず、この年(三〇〇)、雲間の地に再び輝しく現れた、と。雲間とは、華亭の別名であり、陸機兄弟の生まれ故郷であった。⁽²⁾従って、この書は、宋以後に頻見する郷土人の作品集出版の一つとしても捉えうるわけである。

この書の性格について、もう少し述べてみたい。明の正徳刊本『陸士龍文集』卷一の終りに付す刊記には、

二俊文集以慶元六年二月既望書成、懸學職事校正監刊者三員、題名于後、

懸學司訓進士朱 奎 監刊

懸學直學進士孫 垓 校正

懸學學長鄉進士范公姿同校

とあり、この文集が地方官刊本の一種であることを示している。華亭縣のある吳の地は、當時、蜀や閩の地とともに出版業の盛んだった地域として有名である。また地方で書物を刊行した官署は、周知のごと

く、茶鹽司・轉運司を始めとして、縣齋・書院等に及んでおり、この〈晉二俊文集〉は、嘉興府華亭縣學の官刊本であり、一種の縣學本といえるわけである。紹興十二年(一一四二)、江州寧化の縣學で刊行された『群經音辨』や、淳熙十年(一一八二)、象山の縣學で刊行された林鉞撰『漢雋』等とともに、南宋期における縣學本の代表といえるだろう。官刊本は、原則として書物の普及を第一義とした非營利出版であるだけに、この場合も、版本ヴァージョンとしてはかなり優れていたと思われる。そしてこの文集の出版は、二陸集の流傳に大きな役割を果たすことになった。今日残る二陸集が、いずれもこの系統を引く版本であることは、このことを何よりもよく物語るものであろう。

〈晉二俊文集〉刊行後、約四十年を経た頃に成る『直齋書錄解題』^(卷16, 別)には、陸士龍集十卷を陸士衡集十卷とともに著録している。その解題のなかに、「太康平吳、二陸入洛、張茂先所謂利獲二俊者也、云々」として、特に張華が二陸を二俊と呼んだ逸話を取りあげているのは、おそらくこの陳振孫の傳録した藏書のなかに、徐民瞻刊〈晉二俊文集〉を含んでいたからであらう。

三 陸救先校宋本の解題—靜嘉堂所藏—

現在、北京圖書館に藏する宋槧陸雲集(潘氏舊)については、すでに述べたことがあり、ここでは、靜嘉堂に藏する陸救先校宋本『校本二陸集』について述べてみたい。その書は、有名な清末の藏書家陸心源(一八三二—一八九四)の皕宋樓に藏された稀觀本であり、二陸集あわせて四冊(冊)から成る書である。また宋槧との對校を行なった清初の陸貽典(字敬)は、詩・書に巧みな校勘學者であり、同時に絳雲樓・汲古閣・述古堂につぐ海虞の有名な藏書家の一人でもあった。ちなみに、陸

貽典の校本の主要なものは、陸心源の藏書となつてゐるようである。「校本二陸集」には、次のような陸貽典の手跋が記されている。

丁未孟陞十有四日、從何子道林、乞得此本、繡季出阮宋刻、既與繡季校本一本、隨又校得此本、凡皆校過兩次、宋本譌字、亦俱勘入、其餘當亦無遺、惜宋本殘缺、不能無恨耳、貽典再識、

文中の「繡季」とは、毛斧季、つまり毛屨（西〇七三）のことであらう。毛屨は、毛晉の五子（表・裏・裏・裏）のなかの末子であり、實は陸貽典の女婿であつた。また葉昌熾の説によれば、陸貽典と毛屨の父毛晉とは、ともに錢謙益を師とする同門の間柄であつたといふ（『藏書紀事の陸貽典』）。

陸貽典と女婿の毛屨は、ともに校讐にすぐれ、二人の關係した手校本は、陸心源撰『皕宋樓藏書志』詞曲類の條に散見する。たとえば、その一つである辛棄疾撰『稼軒詞』（卷四）には、陸、敕、先・毛、斧、季、校、宋、本とあり、毛屨の跋に、「辛亥（陸心源）七月三日、敕先所校元板、重校訖」とみえている。また陸貽典の「既に繡季と一本を校す」といふ語によれば、二陸集の校宋本にも、二人の共同による手校本があつたことになり、靜嘉堂に藏する校宋本は、後に陸貽典が自ら一人で行なつた手校本であつた。

陸貽典が「恨みなき能はざるのみ」と嘆息したごとく、その二陸集の宋版は、實はいずれも足本ではなかつたのである。宋版の陸機集は第七卷の首四葉（より正確には、卷頭から第五葉の十七行「百年歌」の「食」の「秋」の「行」以下の九行）を缺いてゐた。これに對して、宋版の陸雲集は、第六卷第三葉（有缺「食」中「長房」）から第十卷第七葉（與陸典書「其六」の「大」）までの約四、五、分を缺いてゐた。また二陸集の宋版の紙數についても、各卷末にそれぞれ記されてゐる。宋版陸雲集についてのみ記すならば、卷一（陸心源）・卷二（陸心源）・

卷三（陸心源）・卷四（陸心源）・卷五（陸心源）・卷十（陸心源）であつたといふ。

陸機集の各卷末には、陸貽典の手識として、それぞれ卷一（又校）・卷二（又校）・卷三（又校）・卷四（又校）・卷五（又校）・卷六（又校）・卷七（又校）・卷八（又校）・卷九（又校）・卷十（又校）とあり、陸雲集の卷末にも、卷一（又校）・卷二（又校）・卷三（又校）・卷四（又校）・卷五（又校）とみえ、さらに卷十の終りには、

丁未二月十日辰刻、寒雨中、毛繡季宋刻本、再校訖、常熟敕先陸貽典識、

と記され、「校本二陸集」の作られた時の状況を少し傳えている。文中の「丁未」とは、清初の康熙六年（二〇七）のことと推定され、陸貽典にとつては、『管子』を校勘した翌年にあたつてゐる。また初め校讐をもにした毛屨は、このとき二十八歳である。この『校本二陸集』は、結局、康熙六年の二月初旬、陸貽典が、約十五日前の孟陞（正月）十四日に入手した明の正徳刊本（陸心源）のうえに、宋槧との異同を書きつけて二月十日に完成させた本といふことになる。

この陸敕先校宋本には、靜嘉堂に藏する手校本のほかに、海寧の藏書家陳鍾（二〇七）によつて書き寫された鈔本があり、後に清末の藏書家周星詒（一八三）の架藏に歸した。周氏所藏の精本は、後に盡く蔣鳳藻の鐵華館に藏されたので、この陳仲魚傳錄本も、その架藏に歸したものとされる。ただし現存する『鐵華館藏集部善本書目』には、未著録である。

民國の藏書家鄧邦述は、その陳仲魚傳錄本を傳增湘（字）のもとで見たとする。『寒瘦山房藏存善本書目』卷七自校本の條に、

彙在沅叔許、見二俊集校本、及收此汪士賢本、去歲（民國十三年）入

都、乃丐歸過錄沅叔所見原本、是陳仲魚過錄正德陸元大刊本、とあるからである。

四 元・明初の陸雲集

元代における陸雲集の流傳狀況は、實は詳かではない。ただ都穆の陸機集の跋に、

士衡集十卷、宋慶元中、嘗刻華亭縣齋、歲久、其書不傳、とあり、同じく都穆の陸雲集の跋に、

其所著、有集十卷、然人間之傳、率錄本、仍橋（た）、不便覽觀、とあることから推測するならば、南宋の慶元六年（三〇〇）に刊行された晉二俊文集本は、その後、次第に流傳を斷ち、明初においては、すでに稀觀本であった。しかも當初、木版本であったこの合刻本も、その後重刻されることなく、おおむね錄本（寫本）として傳わるることになった。その結果、脫文・誤字・訛字・臆改等が次第に多くなってきたのも、寫本の性格からいって、少しも不思議ではない。しかし、刊本のすでにまれな當時にあっては、この寫本の果たした役割は確かに大きなものがあつたはずである。

明の正統六年（四二二）に成る『文淵閣書目』卷九（百字號）には、陸氏二俊文集一部闕とある。この函架書目は、書名・冊數・全不全等を記した點檢簿（目録）にすぎないが、二陸集が完本ではなく、闕本であるというその記述は、やはり注意すべきであらう。文淵閣が明朝の宮廷文庫であることを考えるならば、當時における二陸集の傳本が非常に少なかつたことを知るべきであろう。ちなみに、明初の藏書家葉盛（四三〇—四七四）撰『茶竹堂書目』卷三には、陸氏二俊文集四冊を著録している。

五 陸氏重刻本・陸清河集・汪士賢校本

明の正徳十四年（五二九）、徐民瞻刊《晉二俊文集》本を重刻したのは、吳郡の陸元大（字子元）であつた。行款は半葉十行、行十八字である。十六世紀前半にあたる明の正徳・嘉靖年間には、宋槧を覆刻する風氣が盛んになった時期であり、吳中の地を中心とし、集部の書を主としていた。特に嘉靖年間以降は、古文辭といわれる強烈な復古運動の影響下にあつたからである。このことは、『皕宋樓藏書志』を始めとする近・現代の主要な書籍目錄等によつて確認することができる。陸元大によるこの重刻も、やはりそうした風氣のなかで捉えるべきであらう。《四部叢刊》に收める版本（テキスト）は、この陸元大翻宋本の影印であり、『江南圖書館善本書目』に著録するものである。つまり、清末の有名な藏書家丁丙（一八三〇—一九〇九）の舊藏書であつた。

都穆の陸雲集の跋には、

吳士陸元大、近刻士衡集、訖工、復取斯集、以予家本校而刻之、其亦有功於二備者哉、

とあり、明の正徳己卯（十四年）七月望（十五日）の日時を記している。同じく都穆の陸機集の跋に、同年「夏六月」とあるのによれば、二陸集は六月・七月と續いて刊行されたわけである。

跋を書いた都穆（四二五—四五三）は、顧元慶・文徵明等の蘇州の有名な藏書家の一人であり、明の手抄本の名家としても知られる。また陸元大と都穆は、ともに二陸と原籍地を同じくする吳郡の人であり、従つてこの翻宋本も、南宋の官刊本と同様に、郷土人の文集出版の一つとして捉えることができるわけである。都穆がこの跋を書いたのは、その晩年にあたり、當時すでに太僕少卿を加えられて致仕した後

であつたと思われる。別の稿で述べた現存する唯一の宋槧（北京藏）が、この都穆と地域・時代をほぼ同じくする文徵明の舊藏書であつたことも、自然に思い起こされるのである。

この正徳刊本陸雲集は、南宋の官刊本の覆刻本ではない。都穆の跋に、「予が家の本を以て、校して之を刻す」とあるごとく、すでに校定の部分をかなり含んでいた。これは、おそらく陸元大の使用した底本、および都穆の家藏本がともに刊本ではなく、寫本であつたためであらう。だからこそ、「橋（譌）に仍りて誤りを踵」ぎ、讀みがたいと述べたのである。

陸元大の事跡は、あまり詳かではなく、彼と交遊關係のあつた顧元慶の『夷白齋詩話』に、簡略ながら次のように記されている。

陸元大本洞庭涵村世家、晚歲業書、浮沈吳市中、嘗刻漫齋、中有寄余詩、其聯云、屋裏陽山應在席、門前春水欲平橋、結云、常記尋君過澹墅、竹青塘上喚輕橈、後寓丹陽孫曲水館、疾亟、抵家卒、子元天性極疏懶、好遠遊、如在世外、亦不多見也、

これによれば、陸元大は、晩年、出版業を兼ねた廣義の書籍商であつたと思われ、この二陸集のほかに、『花間集』十卷の重刻本も傳わつている。『花間集』の刊行は、二年遅い正徳十六年（二三）のことであり、南宋の晁謙之本の誤りを約三十箇所にわたって訂正した明版中の善本であるとされている。陸元大が「晚歲、書を業とし」ていたという意味では、一種の坊刻本といえるわけであるが、明の万曆以後の粗悪なそれと異なることは、いうまでもないであらう。

陸氏重刻本を最も高く評價したのは、明の万曆年間、曹學佺とともに閩中の詩壇の中心となつた徐燭である。このことは、繆荃孫輯『重編紅雨樓題跋』卷一陸士龍集の條に、

張幼于曾以小陸鈔本貽先兄、繕寫明朗、此乃都元敬與吳士陸元大校刻者、卷末乃留宋人名字、依宋板也、贊對無差、勝今坊間所梓者多矣、

とあることによつて知ることができ、この文は、万曆三十四年（二六）の末に書かれたものであり、万曆三十年の自序をもつ『徐氏紅雨樓藏書目』には、未著録の書である。五万三千餘卷の藏書を誇つた龍峰書舎に無かつたことは、陸氏刊行後、約九十年を経た當時、その重刻本はすでに稀覯本となつていたわけである。陸雲集の「寫本」（刊本ではない）を見た時の徐燭の喜びは、このことを何よりもよく物語るものであらう。従つて清代になると、この陸氏重刻本はますます貴重視され、習見の書は一切著録しないといわれる張金吾撰『愛日精廬藏書志』の中にさえ著録されることになつたのである。

徐燭が全く陸雲集を藏しなかつたというのではない。『徐氏紅雨樓藏書目』（四）に、『漢魏六朝七十二家集』（三百五）を著録するからである。その中に收める『陸清河集』八卷の構成は、卷一に賦、卷二・三に詩、卷四に騷・啓疏、卷五・六に書、卷七に頌・贊・箴・碑、卷八に誄文・附録となつており、附録の部分には、陸雲傳（唐の本）・「訪二陸故居」（宋の蘇）・「二陸祠送神歌」（元の劉）・遺事・集評を収めている。

この陸清河集八卷本の收録作品数は、明の陸氏重刻本（十卷）とほぼ同じであるが、時に「羊腸轉賦」（二）・「春節帖」（五）・「泰伯碑」（七）等の作品が付け加えられていたり、「與平原書」に、「此書舊誤接前二蝶下、作一編」等の注記が加えられていたり、しかし、やはり最も注目すべきことは、張燮が唐宋以來の十卷本を八卷本に再編したこと、および集名を改めたこと（陸雲集・陸士龍集）であらう。張燮の總集は、「張燮、七十二家集を輯せしより、漢魏六朝の遺集、一編に匯（ま）

る」(『四庫全書總目』卷一八九の)と評されるごとく、總集編纂史上における意義は非常に高いが、その中に収める陸雲集についていえば、少くとも形態のうえで、従来の卷數と集名を意識的に改めたわけである。そしてこの影響下にある張溥(二〇三〇—二〇四一)は、その新しい集名(陸雲集)を襲い、さらに二卷本に再編している(『漢魏六朝』)。この點こそ、舊刻本を重んじる藏書家等においては、坊刻本の一種の粗悪さと映じたものではなからうか。また明代の書に普遍的な出所の明記を缺くという點とも、密接に關連しているだろう。清の嚴可均は、張溥の總集に對して、「知與鄙書互有漏落、然張氏未載出處、錯誤甚多、後人覆檢、未可輒補鄙書也」(『全士五元代書目』)と評している。

この張變の總集と同様に、六朝期の別集を集大成したものととして、万曆刊本を有する汪士賢・呂兆禧・焦竑・程榮らによる『漢魏六朝諸家文集』(『六朝文集』)が傳わり、二陸集はともに徽州新安の汪士賢の校定を経たものである。すでに清末の繆荃孫(一八四〇—一九一〇)撰『藝風藏書記』卷六や民國の張均衡撰『適園藏書志』卷十に指摘されるごとく、汪士賢校、二陸集は、ともに明の陸氏重刻本の系統(十卷)を引き、すでに行款を改めた版本である。清の錢培名は、自ら校定した『陸士衡集』卷十の跋に、「新安汪士賢輯晉二十家集、亦從此(陸氏重刻)翻刻、舛誤悉同」と述べている。また内閣文庫に藏する汪士賢校『陸士龍文集』(『六朝文集』所收)や『二俊文集』(『陸氏重刻』)には、いずれも卷末に「錢唐の郭志學寫」という語が付されており、金閩(州)や錢唐(州)等の地名によれば、この書は、江南の地においてまず出版されたのであらう。汪士賢校本の共通した特徴の一つは、『晉書』の本傳を載せることである。この點では、張變・張溥の總集と同じく、明代に編纂・校定された別集に見られる一般的な傾向といつてよいだろう。つまり、讀

者層に作者に關する基礎的資料を提供するわけである。また同校二陸集には、南宋の徐民瞻の叙が付載され、時には都穆の跋も載せられている。しかし、陸雲集卷一(陸氏重刻)の終りに付す宋代の刊記は、すでに削られている。ちなみに、『圖書寮典籍解題』(『漢魏六朝』)に、「陸士龍文集一〇卷(晉陸雲撰、正德一、四、三册)と記すのは、本來、陸氏重刻本に付載されていた都穆の正德十四年の跋が、たまたま汪士賢校本にも收録されていたために生じた誤りであり、汪士賢校本は現在のところ明の万曆刊本を早期のものとしている。このことは、『四庫全書總目』卷193『漢魏名家』に、「明汪士賢編、士賢、徽州人。是編所錄、自漢董仲舒迄周庾信、凡二十二集、刊於萬曆中、在張溥百三家集之前、與張變七十二家互相出入」とあることによつて確認することができ

六 明末・清初の陸雲集著錄狀況

次に明代後半と清初の書籍目録を中心として、陸雲集の流布や版本の狀況を少し述べてみたい。涿州の高儒撰『百川書志』卷12には、二陸集各十巻を著録し、その陸雲集の解題には、

晉清河內史陸雲士龍、機之弟也、時稱二俊、賦箴八、詩三十五、附二、文八十六、附三、騷九、共一百三十八篇、

とあつて、別集所收の作品數を明記している。この家藏書目は、世宗の嘉靖十九年(一五四)に成り、従つて後の万曆年間に刊行された汪士賢校陸雲集十卷本ではなく、また卷數が十卷である以上、すでに述べた張變再編の陸清河集八卷本ではない。解題に「時に二俊と稱せらる」とある語によれば、高儒所藏の二陸集は、やはり陸氏重刻本であつたと思われ。

これに對して、丁丙輯『善本書室藏書志』卷四の陸士龍文集十卷の條には、

集凡十卷、賦八首、詩三十首、誄三首、頌四首、讚一首、嘲二首、騷九首、書七十二首、啓六首、附士衡・孫顯世兩家贈詩、嚴宛陵・卓茂安書、

とあり、作品數を二三五篇としている。丁丙舊藏の陸氏重刻本は、すでに述べたごとく、〈四部叢刊〉の底本であり、この記述は『天祿琳琅書目』卷20(編)明版集部に著録する晉二俊文集のそれと同じであり、おそらく丁丙は、『天祿琳琅書目』(編)に據って記したのであらう。

兩者の記す作品數は、ほぼ同じ(二三五篇)であるが、やはり問題となるのは、詩數における大きな差(高麗二三〇首)であらう。しかし、これも、おそらく陸雲集の詩の條に、他の詩人の贈答詩や陸雲の失題詩・逸文等が含まれているために生じたものであり、版本の相違によるものではないと思われる。つまり、その作品數は、ともに陸氏重刻本に基づいたものであり、『晉書』陸雲傳に記す作品數(三四九篇)のほぼ四分の一に相當している。

李廷相(四八〇～四八四)撰『漢陽蒲汀李先生家藏目錄』、朱勳美編『萬卷堂書目』には、陸雲集はともに未著録であり、また神宗の萬曆三十三年(一六〇五)に編纂された『內閣藏書目錄』にも、陸雲集は未著録である。つまり、正統六年(一四四一)に成る『文淵閣書目』のなかに著録されていた二陸集(宋版)は、その後散佚して、約一五〇年を経たこの官撰書目には、すでに著録されていないわけである。また明の文淵閣には、一時、陸氏重刻の明版が藏された。その明版も散佚したが、清の中期になると、再び宮中の書庫に藏されることになる。清の嘉慶三

年(一七九八)に成る『天祿琳琅書目』卷20(編)明版集部に、〈晉二俊文集(六册)〉を著録し、その解題に「明の秘府の藏」とあるからである。

官撰書目として始めて收めた藏書印の條によれば、この文淵閣舊藏本は、無錫の藏書家邵寶(四〇六～四七〇)の容春精舍に藏されて、八二泉邵寶が押され、最後に乾隆帝の第十一子、成親王永理によって〈詒晉齋印〉が押された後、宮中の昭仁殿に藏されて、この『天祿琳琅書目』(編)に著録されたのである。乾隆四十六年(一七八一)に一應完成した〈四庫全書〉の著録本が、朝紳勵守謙の家藏本(藏本)に基づき、しかも永理が四庫全書館の正總裁の一人であることを考えるならば、この文淵閣舊藏本は、それ以後約十七年間の収集によるものであるらう。

祁承燦撰『澹生堂藏書目』卷13の漢魏六朝文集の條には、「陸士龍集三册十卷 又、一册四卷」を著録する。明の萬曆年間、靜紅齋刊本の陸士龍集四卷(册)が専ら詩賦のみを集めたものである(陸承燦・顧延福編『明代版本圖録』卷六)ことからすれば、この四卷本も、おそらく詩賦のみを集めたものであらう。また晁瑛撰『寶文堂書目』(藝)にも、晉陸士龍集を著録している。

趙琦美(一五五〇～一六二四)撰『脈望館書目』には、陸士龍集二本を著録し、さらに『六朝文集』も著録している。『六朝文集』所收の陸雲集は、すでに述べた汪士賢校十卷本である。このほか、萬曆四十四年(一六一六)に成る陳第撰『世善堂藏書目錄』(下卷)にも、陸士龍集十卷を著録するが、その書目は明代の多くの藏書目錄と同様に、書物の簿録にすぎず、この本の系統や版本は不明である。また明末の天啓丙寅(一六三二)の王佐聖の序をもつ陸士龍集十卷があり、清末の沈德壽編『抱經堂藏書志』卷51に、鈔本として著録されている。『晉書』陸雲

傳を付載していること、および十卷本であることから推測するならば、おそらく汪士賢校本の系統を引くテキストであろう。今日、明の長洲吳氏叢書鈔本の陸士龍文集十卷二册も傳わっている（國立中央圖書館藏）。ちなみに、陸雲集は寧波の天一閣には藏されなかったようである。

明末から清初にかけて、江左第一の藏書を誇った錢謙益撰『絳雲樓書目』（續三）（六朝文書類）には、陸士衡集二册（卷十）とともに、陸士龍集三册（卷十）を著録し、また錢曾撰『述古堂書目』（卷三）には、『宋本影抄』と注した陸士龍集十卷（本）を著録している。さらに陸士衡集十卷（宋本影抄）も著録されていることからすれば、二陸集は、能筆な者に良質の紙墨をあたえて宋本を模寫させた、いわゆる影宋鈔本として、述古堂に藏されてきたことになる。その影宋鈔本の解題は、善本書目の解題である『讀書敏求記』卷四に見えるが、明版との相異については全く述べられていない。しかし、海寧の藏書家陳鱣が乾隆四十四年（一七九九）に目睹したこの述古堂所藏の影宋鈔本には、〈明版〉ではすでに削除されている宋版の印工や紙價などが、卷末に詳しく記されていた。

七 陸敕先校宋本の價值——陸氏重刻本との比較——

ここで、明版中の善本とされる陸氏重刻本（四部書刊）の版本としての「優劣」について、宋版との比較という観点から少し述べてみたい。陸氏重刻本は、すでに述べたごとく、南宋の官刊本の系統を引き、すでに行款を改めた版本である。またその底本は寫本であったと推定され、かなり校定の部分を含んでいた。陸氏重刻本（この章のみ）には、宋版（陸貽典の參照）の訛誤を訂正した箇所も多いが、逆に訛字・誤字・脱字等を中心とした誤りもかなり多い。また潘宗周の『寶禮堂宋本書

錄』（宋刊本）には、

明覆本卷八、錯簡三葉、其上下文、不接之處、即爲宋本前後分葉之處、是必宋本葉次、偶有顛倒、刊者不察、誤相沿襲、

とあり、明版の卷八には、錯簡箇所があると指摘されている。従って、この明版は、徐勣によって激賞されたごとく、確かに陸雲集に關する善本の一つではあるが、なお最良の善本であると評しがたい。

逆にいえば、今日陸雲集（陸謙益）を讀む場合、宋版との對校を記した陸貽典の校記は、必見の參考となるわけである。陸心源撰『群書校補』卷67には、

陸士衡士龍兩集、明嘉靖中陸元（元）太重雕宋本爲最善、余近得宋慶元間徐民瞻刊本、乃知卽陸本所祖、以之互校、陸本尙多脫誤、

とあり、明版は宋版に較べて脱誤の部分が多いと述べられている。また傍點を付した部分によれば、陸心源が二陸集の宋本を實際に手に入れたように見えるが、實はそうではなく、すでに述べた陸貽典校宋本を藏していたにすぎない。このことは、『群書校補』の殘卷の注記が盡く陸貽典の識語と一致していること、および、その校記も全て陸貽典のそれを収録したものであること、この二點から斷ずることができ。宋本に對する藏書家らしい屈接した欲求の表れといえようか。従って、民國の章鈺（一八五〇—一九三〇）の案語に、「陸心源又得宋慶元間徐民瞻刻本」とあるのは、陸心源のこの言葉などに引きずられた誤りである（讀書敏求附錄）。

次に、紙幅の都合から、陸心源撰『儀顧堂題跋』に載せる陸雲集の卷一と卷二の文字の異同を記してみたい。

卷一 逸民賦 翳蒼穹谷

歲暮賦 長嘆息而永懷

（宋版） 蒼誤奔
歎譌難

寒蟬賦 如飛焱遭驚風

遭誤遣

綴以玄冕

玄誤空

卷二 命大將軍(詩題の二部) 下

明版脱將軍二字

贈汲郡太守 扇爾清休

扇誤商

明版と宋版との詳細な對校の結果は、『群書校補』卷67に譲るが、
關字・衍字・脱字の例も少し擧げておきたい。明版の關字の例とし
て、

卷一 登臺賦

蘭堂以逍遙

卷二 大將軍宴會被命作詩(共)

觀嘉客

卷六 登遐頌(眞伯康の條)

雲精九

等があり、宋版では、それぞれ歩・俯・陔の字が記されている。また
明版では、「寒蟬賦」序に「貧才所空不敷」の句があるが、「不空」の
二字は衍字であらうし、作品の「其五」の二字を脱している例もある
(卷二の「征西大將軍京」
陸王公……作此詩)。

ちなみに、陸貽典の參照した宋版の誤字もまた多い。それは、一般
的に一見してわかりやすい性質のものではあるが、數量的にかなり多
いようである。宋版卷一の誤字・訛字の例として、

逸民賦 溢美有大惡之尤

美・蓋(明版(宋版))

歲暮賦 雖呼翁其難假

呼・乎

喜鬢賦 天地曄兮

天・夫

登臺賦 仰凌眇於天庭兮

仰・卯

寒蟬賦 舒輕翅以迅翰

輕・經

などがある。

宋版と明版(陸氏重)との對校を終えた陸貽典は、『校本二陸集』の卷
末に、

凡宋板書、未嘗無脫誤處、然佳處正得十之七八、有謂宋刻一字無
譌字者、可爲一榮也、敕先校畢二俊集偶書、

と記している。宋版に對するこの認識は、前の年(五年)に校勘した
『管子』の中に、すでに窺うことができる。

古今書籍、宋版不必盡是、時版不必盡非、然較是非以爲常、宋刻
之非者居二三、時刻之是者無六七、則寧從其舊也、

この言葉は、葉德輝(二八益一元)撰『書林清話』(宋刻書訛字)に引
かれて廣く知られており、陸貽典の校勘學者としての見識を窺わせる
ものである。つまり、自らの校讐の體驗に基づいて、宋版にも二割か
ら三割の誤りを含んでいるとして、通行本よりやや優るとする評價を
下している。そしてこの認識は、翌年のこの『校本二陸集』の對校を
通じて、再び確認されたわけである。

陸貽典の校語には、宋版の行款・紙數等も記され、明瞭な訛誤さえ
も全て書き記されている。そうした態度の根底には、(妄りに文字を
改めぬ)とする校勘學の原則に忠實な姿勢が認められ、従つてその校
語に基づいて、毛扆の宋槧を復原することも充分可能なわけである。

ただ陸貽典の校書の方法は、主として二書による對校であり、この意
味では、校勘としては最も初歩的な部類に屬し、衆本の互勘、識字や
博徴に基づく是非の判斷等の態度はまだ見られない。この『校本二陸
集』も、宋版と明版の對校にすぎず、明らかな誤りの指摘を除いて
は、ほとんど陸貽典自身の明晰な判斷力を窺うことはできない。しか
し、北京圖書館に藏する唯一の宋槧陸雲集が容易に見られない現在、
この陸貽典校宋本のもつ價值は、非常に高いといわなければならない。

八 四庫提要批判—原本提要に觸れて—

高宗の乾隆時代の學問的水準を表す「四庫全書」および「四庫全書總目」に著録する陸雲集について述べてみたい。陸雲集は、いわゆる著録として七閣と翰林院に收められたが、陸雲集は著録・存目ともに未收である。「四庫全書總目」卷148に、陸雲集は「勵守謙の家藏本を編修」したものであるとするが、「四庫全書考證」卷74集部に、陸雲集に對して少しも觸れていないことからすれば、おそらく勵守謙の家藏本に全く依據して、その文字は少しも改められなかつたのであらう。また四庫全書に陸雲集のみ收められたのは、勵守謙所藏のそれが、たまたま陸雲集との合刻本でなかつたことを示すのであらうか。「今於元代以前、凡論定諸編、多加甄錄」(「四庫全書總目」)という別集の著録方針からみても、陸雲集のみが收められたのは極めて不自然だからである。

この陸雲集は、直隸靜海の勵守謙の家藏本に據る、いわゆる私人進獻本に基づく書である。乾隆三十九年(壬戌)五月十四日に發布された第七次の聖諭によれば、勵守謙は朝紳の黃登賢・紀昀・汪如藻らとともに、百種以上の書を獻上し、内府所藏初印の『佩文韻府』一部を賜っている。『涵秋閣鈔本』『進呈書目』によれば、勵守謙は合計一七二種の家藏本を獻上したとし、その内、實際に著録された部数は三〇種、存目の部数は五七種であつた。ちなみに、勵守謙は、陸遵書・凌瑚・汪體仁とともに畫名があり(『國朝畫壇家』)、この四庫全書館では、校勘永樂大典纂修兼分校官に任ぜられていた。

次に陸雲集に對する『四庫全書總目』(以下、『總目』)の解題を引いて、二つの問題點を吟味したい。

慶元間、信安徐民瞻始得之於秘書省、與機集並刊以行、然今亦未見宋刻、世所行者惟此本、考史稱雲所著文詞凡三百四十九篇、此僅二百餘篇、似非足本、蓋宋以前、相傳舊集、久已亡佚、此特真合散亡、重加編輯、故敘次頗爲叢雜、如答元平原詩二首、其行矣怨路長一首、乃機瞻雲之作、故馮惟訥詩紀、收入機詩內、而此本誤作雲答機詩、又綠房含青實四語、及逍遙近南畔二語、皆自藝文類聚美滄部・嘯部摘出、佚其全篇、故詩紀以爲失題、系之卷末、但註見藝文某部、此乃直標曰美滄曰嘯、殆明人不學者所編、又出詩紀之後矣、特是雲之原集、既不可見、惟藉此以傳什一、故悉仍其舊錄之、姑以存其梗概焉、

この解題中には、二つの大きな問題點(波線を付した部分)が含まれている。(1) 宋版散佚説、および、(2) 『古詩紀』の後に出来るとする明人編纂説(八編纂説との「古詩紀」の後に出来る)の二つである。この二つの論點は、「皆、公(昀)の手に出づ」(江蘇撰「國朝畫壇家」)と記される『四庫全書簡明目錄』卷15にも、「宋徐民瞻所刻亦散佚、此本蓋明人所重輯、編次頗爲叢雜」と述べられている。つまり、陸雲集解題の骨子といふことができよう。

まず(1)の宋版散佚説について述べてみたい。この説は、民國の潘宗周(寶鑑)『舊藏の宋刊本が、現在なお北京圖書館に藏されているという一事によって容易に否定することができるだろう。その宋契陸雲集は、蘇州の詩文書畫の指導者であつた文徵明(四七〇—五五九)の舊藏書であり、その後、項元汴・季振宜・徐乾學・朱學勤等の著名な藏書家の手を経た由緒正しい本である。

また、すでに述べた錢曾や後述する張金吾は、ともに陸雲集の影宋鈔本を藏し、さらに『北京圖書館善本書目』には、清の影宋抄本(二俊文集二十卷)(三)を著録している。その書には、趙懷玉(一七四七—

一八四)や翁同書の校並びに跋があるという。これらの影宋鈔本の實在は、その對象となつた宋版の存在を想像するのに充分であらう。陸貽典の對校に使用された宋版(副本)も、少くとも清初の康熙帝の世までは實在していた。当時、陸雲集の宋版を捜し得なかつたことは、陸機集の未著録とともに、『禁書總目』『抽燬書目』等に象徴される違碍書籍の禁絶という、厳しい政策下における「搜書の限界」を表すものであらう。

次に(2)の『古詩紀』の後に出来るとする明人編纂説について検討してみたい。この説の根據は、(イ)「答兄平原詩」二首の一首は、陸機の作品が混入したものであること、(ロ)『藝文類聚』卷82下の芙蓉部・卷19の嘯にある陸雲詩の逸文を収めること、この二點に集約することができる。さらに、この明人編纂説が生まれたのは、實は馮惟訥(一五三—一五七)編『古詩紀』を参照した結果であり、この意味で、「また詩紀の後に「出づ」とする説も自然に導き出されたわけである。この「明人不學者の編する所」という説は、校訂が不充分で、好んで古書の改竄を行なつた」とする明刻本に對する共通した認識と關連して、かなり高い説得性を持っているといえるだらう。そしてこのうえに『總目』自身の權威が加わつて、たとえば、桂湖邨撰『漢籍解題』に、「現行本は明人の哀輯する者なり」などと無批判に踏襲されていくのである。

しかし、この説の論據である「陸機の詩の混入」、および「逸文の收集」という事實は、すでに明の正徳十四年(一五二九)に刊行された陸氏重刻本の中に確認することができる。つまり、その二点を論據として、後の嘉靖三十九年(一五七〇)に始めて刊行された『古詩紀』以後に成るとするのは、四庫全書の底本の如何を問はず、明らかに推論

上の誤りを犯しているといわなければならない。ちなみに、『古詩紀』の引用諸書(註)の條に、「二陸集」を著録していることからすれば、馮惟訥は別集・總集・類書等を用いた廣範な作品搜集の過程で、陸雲集のなかに、「陸機の詩の混入」および「逸文收集」という事實が存在することを知つたのであらう。いいかえれば、馮惟訥の陸雲集に對する功績は、作品の判別と出所の確認という點に求めるべきであらう。また『古詩紀』以前に刊行された陸氏重刻本は、すでに述べたごとく、一種の校刻本ではあるが、宋版の形態をかなり踏襲していると推測され、意識的に作品の付加や逸文の收集等を行なつたという形跡は全くない。つまり、「陸機の詩の混入」、および「逸文の收録」という事實は、少くとも明代以前の段階にあるのではなからうか。

この疑問は、靜嘉堂に藏する陸貽典校宋本によつて解決することができる。問題の三作品は、すべて陸雲集卷四(十卷)に收録するものであり、その部分は、陸貽典の對校に使用された宋版(本)の中に、幸いにも散佚せずに残っていたからである。陸貽典の校記によれば、宋版の卷四は、二葉・空五行であり、その三作品に對しては、文字の異同を除いて、全く校語を缺いている。このことは、少くとも陸貽典の參照した宋版が、明の陸氏重刻本と同様に、すでに作品收録上の不注意を犯し、さらに陸雲詩の逸文を收録していたことを示している。

明人編纂説に對する批判は、民國の潘宗周撰『寶禮堂宋本書録』の中にも、家藏の宋刊本(現在、北京、圖書館藏)を據りどころとして、「宋本即ち已に是くの如きを知らず、館臣妄りに指摘を加ふるは枉れり」と述べられてゐる。つまり、南宋の徐民瞻刊「晉二俊文集」本において、作品の混入や逸文の收録という事實が、すでに存在していたのであり、決して「明人不學者の編する所」の結果ではないのである。

明の陸氏重刻本を底本として、陸機集を校勘した錢培名は、清の咸豐二年（一八五二）に成る『陸士衡集』卷10の跋で

集中殘篇斷簡、雜出不倫、大要出藝文類聚・初學記諸書、而不無罣漏、疑亦北宋人捃撫而成、

と記している。つまり、逸文の收録を北宋人の捃拾とする説である。

また宋代の陸機集自體が、かなり混亂していたことは、南宋の晁公武撰『郡齋讀書志』（卷四上）や清の阮元撰『四庫未收書目提要』（卷一）に詳しい。このようにみても、北宋人の捃拾に成る、と斷言できないとしても、類書による逸文補充という行爲が、南宋の徐民瞻刊『晉二俊文集』本に收める陸機・陸雲の兩集において、すでに行なわれていたと考へるべきであらう。これに對して、『全上古三代秦漢三國六朝文』を編纂した嚴可均（七三二—一〇〇）は、その凡例において、

唐已前舊集見存今世者、僅阮籍・嵇康・陸雲・陶潛・鮑照・江淹六家、蔡邕集宋時得殘本、重加編次、餘無存者、

と述べ、陸雲集を唐以前の舊集であるとしたが、陸機集は明人の輯本の一つに數えている。このことは、「附見存漢魏六朝文集板刻本目錄」においても、重ねて述べられている。つまり、嚴可均は、二陸集とともに都穆二俊文集本（重刻本）と自ら注しながら、陸雲集は「舊本」であるとし、陸機集は「其序言宋舊本、其實從羣書纂輯、非舊本也」と注して、陸機集のみを明人輯本とする説を述べたのである。その説は、自ら逸文收集や校勘作業に従事する過程で生まれたのであらうが、南宋時代の合刻本『晉二俊文集』の一方のみを明人の輯本とするのは不自然である。やはり南宋時の兩集がすでに逸文を收録した一種の輯本であったと捉へるべきであらう。ちなみに、北宋の『崇文總目』には、八卷本の陸雲集が著録され、南宋以後、陸雲集は再び唐代

の十卷本に復している。このことは、陸雲集卷四の特徴——①陸機の作品の混入や逸文の收録が見られること、②その他の作品は、全て『文選』と『玉臺新詠』に收めるものであること、③作品の分量が、他の巻と較べて著しく少ないこと——などととも、きわめて示唆的であるといえるだらう。

ところが、同じ四庫提要でも、文溯閣本の卷首にある原本提要を聚抄した金毓黻編『四庫全書提要』卷80には、

慶元間、信安徐民瞻始得之於秘書省、與士龍集並刊以行、蓋即此本、然史稱雲所著文詞三百四十九篇、今此集僅錄二百餘篇、似非足本、疑隋唐志所傳舊集、久已亡佚、此特後人從他書摘抄以行者、故敘次頗爲叢雜、

として、すでに述べた二つの論據が記され、終りに「乾隆四十七年四月恭校上」とある。この原本提要によれば、陸雲集の著録本は南宋の徐民瞻刻本の系統を引く版本であり、すでに「後人」による重輯本であったというのであり、この限りでは、現行の『總目』にみえる(1)宋版散佚説、および(2)『古詩紀』の後に出るとする明人編纂説は生まれないわけである。いいかえれば、兩説の生まれた「然今亦未見宋刻、世所行者惟此本」（註1）、および「殆明人不學者所編、又出詩紀之後矣」（註2）の部分は、原本提要から現行の『總目』に收録される際に、「一手刪定」「一手編注」した總纂官紀昀（二五四—一〇五）の手によって加筆された部分であり、原本提要には本來書き記されていなかったものである。もとより原本提要自身も、各纂修官の分撰した提要そのままではなく、すでに紀昀による刪修の手が加わっているともされ、また現行の『總目』は、簡潔な原本提要に較べて、學術考證の資料・論斷を詳しく記す傾向をもっている。金毓黻が「四庫全書提要解題」の中

で、「凡此於彙編提要爲總目時、皆經一一改正、可謂後來居上矣」と述べるごとく、原本提要の基本的な誤りは、『總目』の中で正されているのが普通である。しかし、この例などは、逆に紀昀の加筆した部分が誤りを犯しているわけである。郭伯恭氏のいわゆる〈紀氏の疏忽と武斷〉に基づく誤りであるといえよう（四庫全書）。

九 張金吾所藏の影宋鈔本と陳揆校宋本

最後に、張金吾（一七六七—一八二〇）撰『愛日精廬藏書志』卷29に著録する陸雲集十卷の〈影寫宋刊本〉について述べてみたい。その條には、すでに第一章で引用した〈晉二俊文集本〉の南宋時の刊記が記され、明の陸氏重刻本では、「題名于後」「縣學司訓進士」「縣學學長郷進士」「同校」とある傍點を付した字が、それぞれ后・計・郷貢（明本）・校正に作っている。この文字の異同は、靜嘉堂に藏する陸貽典校宋本に付載する宋版の刊記の寫しと一致しており、影宋鈔本としての信憑性を高めるものである。

この張氏所藏の影宋鈔本に據って對校したのは、古籍を買っては自ら校勘したといわれる常熟の藏書家陳揆（一七〇〇—一八五五）である。この陳揆校宋本は、後に清末の著名な藏書家瞿鏞の架藏に歸し、その『鐵琴銅劍樓藏書目錄』卷19には、次のように記されている。

此亦陸元大刻本、有都穆跋、卷末有陳子準氏題記云、道光元年十月十二日、借同里張氏愛日齋所藏影宋鈔本校勘、

これによれば、道光元年（一八三〇）に成る陳揆（字は）校宋本は、陸貽典校宋本と同様に、明の陸氏重刻本のうえに、その異同を書き入れたものである。その書が、おそらく陳揆撰『稽瑞樓書目』に、〈陸士龍集十卷（善刻校本）〉と著録するものであろう。陳揆の親友張金吾の藏した

影宋鈔本は、陸機集を缺いた陸雲集のみであるが、足本の十卷本である。陸貽典の據った宋版が約四卷分を散佚させた闕本であることを考えるならば、陳揆校宋本のもつ價值は、非常に高いといわなければならない。

（完）

注(1) この指摘は、すでに高橋和巳氏の「陸機の傳記とその文學」（『高橋和巳作品集』九、河出書房新社）に見える。

(2) 北宋の朱長文撰『吳郡圖經續記』卷中・崑山の條に「晉陸機與其弟雲生於華亭」とある。

(3) 陸心源撰『群書校補』卷67陸士龍集の條に、「誤つて刊して卷一の後に在り」とある。

(4) 『書林清話』卷三の宋司庫州軍都府縣書院刻書の條に詳しい。

(5) 陳彬蘇・查猛濟共著『中國書史』の宋代刻書の發達の條參照。

(6) 拙稿「宋版陸雲集について」（早稲田古代研究會）『古代研究』第八號所收。

(7) 『讀書敏求記校證』卷四上の章鈺の補に、「周星詒云、陳仲魚傳錄陸救先校本、今存予家」とあり、また「蔣鳳藻云、二俊文集陳校宋本、今已歸予」とある。

(8) 倉田淳之助氏の「明代の書誌學」（神田博士）『書誌學論集』所收）等參照。

(9) 顧元慶の事跡は、『藏書記事詩』卷二參照。

(10) 李一氓の『花間集校』の校後記參照。

(11) 陸元大の關係した刻本に、正徳十四年刊『李翰林別集』十卷がある。雙照樓覆正徳本の吳昌綬の叙に、「袁翼刻淳熙本李翰林別集、亦稱得於元大」とある（『花間集校』所引）。

(12) 王雲吾主編『叢書集成初編』所收。

(13) 『四庫全書總目』では、陸雲集の作品數を二百餘篇とするが、おそらく詩篇の數え方の差異に基づくものであろう。

- (14) 「寶藏・南溥董氏・萬卷樓收藏藏書印・子孫永保」の藏書印も記されている。
- (15) 『紹興先正遺書』第三集所收。
- (16) 范懋柱編『天一閣書目』に未著録。
- (17) 『讀書敏求記校證』に引く管庭芬の〈原校〉に據る(前掲の拙稿参照)。
- (18) 郭伯恭著『四庫全書纂修考』第四章所引。
- (19) 『四庫全書纂修考』の附録二「四庫全書依據書本一覽表」に據る。
- (20) 前掲の拙稿「宋版陸雲集について」参照。
- (21) 歸安の藏書家嚴元照の校跋と盧文弨の校もあわせ収録するという。
- (22) 一海知義・鈴木修次兩氏による「馮惟訥とその詩紀」(『日本中國學會報』第十二集)に詳しい。
- (23) 朱珪の『知足齋文集』卷五の紀公墓誌銘・祭同年紀文達公文にそれぞれ見える。

〔付記〕

○貴重な圖書の閲覧を許された靜嘉堂文庫・内閣文庫・東洋文化研究所の關係者各位に對して、心から御禮を申し上げます。

〔補遺〕

○北京圖書館編『中國版刻圖錄』(增訂本)には、寶禮堂舊藏の宋版陸士龍文集卷七の冒頭の半葉(蠶の「九惑」)が鮮明に影印されている(圖版一一九)。その解説によれば、本書の大きさは、縦二・五センチ、幅一五・六センチであるという(一九六一年刊)。